

シカゴ大学のインド学など

(1966年記)

荒 牧 典 俊

シカゴ大学というと、まずエジプト学・バビロニア学・アッシリア学など、古代オリエントの発掘調査・学術研究・刊行事業の一大中心 The Oriental Institute が思い起こされるかも知れない。あるいは物理学の Fermi, 生物学の Loeb, 経済学の Veblen, 社会学の Mead, 哲学の Dewey, 神学の Tillich, 宗教学の Eliade などなどの大学者のいたところ、あるいはいるところとして記憶されているかも知れない。または、このような大教授のもとに、最も才能のある学生達をあつめ、徹底的に勉強させたところ、フット・ボールもさせなかったところとして知られているかも知れない。わずか一年足らずの留学、しかも偉大であるだけに「こわい」先生達のもとで予習と試験と論文に追いまわされた日々、とてもシカゴ大学のインド学のことなど、調べる余裕もなかったし、いまさら書けそうにもないと思われる。しかし夢中になって勉強しているうちに、何か、とほうもなく大きいことを学んだような気がする。学問するとは、どういうことか、を、あらためて教えられたようにも思うし、佛教学を、これから、どのように勉強していこうか、と問う筆者に、いくつかの視点といくつかの活用し得る disciplines が開かれたようにも、思う。愚かな筆者に、ここまで深く印象づけてくれた諸要因——先生達・伝統・雰囲気など——を振り返り、いささか調べもして、「留学記」とさせていただきたく思う。

シカゴ大学がはじめて門戸を開いたのが1892年、そのとき屈指の名総長 William R. Harper のもとに、けた外れの才能に恵まれた若い教授達が、初代のスタッフとして招聘された、という。かれらのどんどん開拓しゆくけれ

ども、正確無比な研究、自由であるけれども厳格な教育が、この大学の学風を形成したようである。Brugman, Geldner, Bartholomae などのもとで研究して学位をとり帰国したばかりの Whitney の直弟子 C. D. Buck が、初代の Assistant Professor of Sanskrit and Comparative Philology として迎えられた。かれは、アメリカにおける比較言語学の父とよばれるが、他方では“Dictionary of selected synonyms in the principal Indo-European languages”, 1949 に結実したように言語を文化の一現象として捉える視野を、もっていた。かれのクラスから Hittite 学の大家 E. H. Sturtevant や構造言語学の道を開いた Leonard Bloomfield が育っていることは、興味深い。

1906年に Harvard 大学の Lanman の高弟 W. E. Clark が、サンスクリット学、インド学を教えるべく招聘された。かれは、Veda, Epic につづくも、いまだ手がつけられていなかった諸文献、例えば Purāṇas, 天文学・医学・詩学・美学書類、佛教の經典群などに主要な関心をよせたようである。おそらく Hopkins の“Epic Mythology”を継承するであろう“*Mythology of the purāṇas*”を著述するべく、プラーナ文献を系統的に読破し、重要事項を索引にし、パラレル・パッセージ、引用文などを集成する、などの仕事をはじめている（但し、それは、現在に至るも、いまだ完成されていない）。そしてインド文化史を、個々の領域・文献に限定せずに、総括的に理解するための誠実な努力を重ねている。例えば、インド文化の東南アジア地域への伝播についての関心（Bali 語に伝えられた Brahmanḍa Purāṇa への関心から導出されたのであろう）、天文学書 Āryabhaṭṭya の研究、プラークリットやサンスクリットで書かれた物語文学の博読などは、そのような努力の一端にすぎない。1927年に母校 Harvard 大学への着任早々、漢訳に伝わる五部派の vinaya の比較研究の重要さ、パーリ伝と北伝の説話の比較研究の重要さなどを説いている。そして1951年に行われた American Oriental Society の総会の presidential address においては、シカゴ20年、ハーバード26年の教授活動をふり返りつつ、これからのインド学の一課題として、パーリ、サンスクリット、チベット訳、漢訳のテキストを比較し、佛教思想史を再構成する

研究の進展を予測している。筆者の寡聞にして、Clarkの視野をもって Puraṇa を整理・解明し、インド文化史上に科学書・美学書類を位置づけ、インド思想史との関連において佛教思想史を再構成する、などの仕事は、まだまだ、将来の課題として残されているように思われる。しかしながら、この presidential address で予測したもう一つの研究分野、a detailed study of Hinduism は、近時、徐々に開拓されつつあるように思われる。

Clark がシカゴ大学を去った後、G. V. Bobrinsky 氏が、Instructor in Sanskrit として着任する。氏は、Edgerton が Pennsylvania 大学で教えていた時に師事しはじめて、Edgerton が Yale 大学にうつった1926年には、Yale 大学の a sterling fellowship をうけている。筆者は、氏の論文と Brief Communication と書評、各一篇を JAOS 誌上に散見したのみである。氏は、現在、Professor of Sanskrit であるが、Dean of Students 及び言語学科の Chairman として行政的に活躍しておられる。1930年代乃至1950年代の The Oriental Institute の瞳目するばかりの活動に比して、サンスクリット学、インド学関係のそれは、ほとんど皆無である。Bobrinsky 氏が一人で講座を担当しておられた、と察せられる。

筆者は、むしろ1957年以後、シカゴ大学のサンスクリット学、インド学を実質的に背負っておられる J. A. B. van Buitenen 教授に、往年の Buck や Clark の伝統が生きているのを見る。Buck が、ヨーロッパ諸言語の語彙の歴史から文化史を読み取ろうとしたとするなら、van Buitenen 教授も、サンスクリットの哲学語彙の歴史からインド思想史を読み取ろうとしておられる。Buck が、きわめて言葉少なく、つねに確固たる判断を下していた、とするなら、van Buitenen 教授も、はなはだ言葉少なに、親切であった。他方、Clark が Veda から Epic, Puraṇa, さらの古典期の諸文献を、一つのインド文化史の流れの中に捉えようとしていたとするなら、van Buitenen 教授も、インド諸哲学思想を一つの思想史の流れとして理解しようとしておられる。Clark が、きわめて広く文学作品を読破していた、と伝えられるように、van Buitenen 教授も、きわめて広い範囲から文献を選んで学生に講読

しておられる。筆者は、van Buitenen教授のもとで一年間、勉強する機会に恵まれたが、所詮、佛教学のはしくれをかじっている学生にすぎない。とてもインド学者としての教授の業績を理解し得る器ではない。唯々、筆者が勉強しながら学び得たところだけを、かいつまんで報告することとしたい。

J. A. B. van Buitenen 教授は、周知の如く、オランダの Utrecht 大学の J. Gonda の門である。1953年、“Rāmānuja on the Bhagavadgīta”, The Hague, 1953によって学位。1953年から1956年、Poona の The Sanskrit Dictionary の project の sub-editor として活躍。その間の成果が、“Rāmānuja’s Vedāthasaṃgraha” Poona, 1956の上梓、及び一連の論文の発表——とくに注目すべきは、Vācārambhaṇam, *Indian Linguistics*, S. K. Chatterji jubilee volume, 1953, Notes on akṣara, *Bulletin of the Deccan College Research Institute*, vol. XVII, 3, 1955, The Śubhāśraya Prakaraṇa (Vuṣṇu Purāṇa 6, 7) and the meaning of bhāvanā, *Adyal Library Bulletin*, XIX, 1-2, 1955などである。

つづいて1957年、ハーバード大学とシカゴ大学で研究。1958年シカゴ大学の Associate Professor of Sanskrit and Indic Studies として着任。1964年から Professor of Sanskrit and Indic Studies で、同時に Director, South Asia Language and Area Center を兼任。このアメリカ在住のはじめの数年間に、Studies in Saṃkhya (I), *JAOS*, vol. 76-3, Studies in Saṃkhya (II), *JAOS*, vol. 77-1, 1957, Akṣara, *JAOS*, vol. 77-2, 1957, Vācārambhaṇam reconsidered, *Indo-Iranian Journal* 2-4, 1958 The Large Ātman, *History of Religions*, vol. 4-1, 1964などの諸論考、及びいくつかの書評を矢つぎばやに発表しておられる。著書としては“Tales of ancient India”, Chicago, 1959と“The Maitrāyaṇīya Upaniṣad : a critical essay, with text, translation and commentary”, s-Gravenhage, 1962が出版されている。

ところで師の Gonda が、大体、古典期に至るまでの Veda, Epic, Dharma 文献, Arthaśāstra, Kalidāsa の kāvya などに通暎していて、そこに表れる哲学概念や文化事象を通時的に究明する学風であるのに対し、van

Buitenen 教授は、古典期の哲学体系の透徹した理解から出発して、そこに見られる哲学概念を Epic の哲学へ、さらに Veda 文献へと遡考して行って、インド古典思想の源流を究明するという方法をとっておられるようである。再々、ChU 6. 1. 4 “vācārambhaṇam vikāro nāmadheyam mṛttikety eva satyam” を論ぜられるのは、これが、Brahmasūtra 2. 1. 4 “tadananyatvam ārambhaśabdādibhyaḥ” に引用されていて、したがってこの句の解釈、如何に Vedānta 諸学派の根本的立場がかかっているからである。というのは、ここの “tadananyatvam” 即ち「brahman と現象世界が別々でないこと」「因と果が別々でないこと」という Vedānta の根本思想を、どういう関係として理解するか、ということが、“vācārambhaṇam vikāro nāmadheyam mṛttikety eva satyam” の解釈、如何、にかかっている。しかも、この句には、vācārambhaṇam という複合語をどう解釈するか、nāmadheyam はどのような syntactical な機能をもつか、各語の Veda における正確な意味は何であるか、などの問題が残されている。これらの諸問題を解決することによって、Veda 祭儀文化以来の伝統において ChU 6 のこの句が、どのような意味をもつか、が確定されなくてはならない。かく Vedānta 諸学派の哲学思想の源流を究明するためにこそ、van Buitenen 教授は、とくに ChU 5 と 6 に注目しておられるのである。

つぎに Studies in Sāṃkhya (I) は、周知の如く Sāṃkhya 哲学の転変説の基本構造の先駆が MBh Śāntiparvan の MBh 12. 239-241 と 187-188 の cosmogony にあることを指摘する。同じく (II) は、ahaṃkāra の概念を例えば、BĀU 1. 4. 1-5 “so ‘ham asmīty agre vyāharat ... so’ ved ahaṃ vava sṛṣṭir asmi ... iti” に見られる創造神の「わたくしは…」という叫び声に遡り、さらに MBh, Śāntiparvan, Mokṣadharmā 章の転変説の発達から ahaṃkāra をふくむ転変説の成立を説明しようとしている。同じく (III) は、Sāṃkhya 哲学の triṣṭa のうち の sattva を論ずる。sattva は、MBh, Śāntiparvan, Mokṣadharmā 章などにおいて (1) kṣetrajña と一対をなす物質存在、(2) buddhi、(3) buddhi のもつ一つの bhāva (4) 悦豫の状態、(5) triṣṭa

の一つ、という五つの意味をもつ。それぞれの意味の *sattva* を検討したあと、それらを、ChU 6, BĀU 2. 3, TaittU 2. 6-7などのsatから導出することを試みる。

ところで、これら諸論考を通して究明されてきた根本問題は、——とくに最近の論文 *The large atman* においてはっきりしてくると思われるが——いかにして Veda 祭儀文化において象徴的に具現され、Upaniṣad 哲学において哲学的に思惟されていた *cosmology* あるいは *cosmogony* が、Epic に重層的に伝えられる錯綜した思想展開の *milieu* を経て、古典期諸学派における絶対存在と人間存在のつながりの哲学へ展開していくか、ということである。換言すれば、いかにして古代の *cosmology* が、中世の *psychology* の哲学へと展開していくか、ということである。はじめの *Studies in Sāṃkhya* (I) では、Śāntiparvan に *buddhi-manas*, *buddhi-indriyaṇi*, *buddhi-aṇu* という転変説があることが論ぜられている。即ち MBh において、すでに人間存在の哲学が芽生えているのである。同じく (II) では、*ahaṃkāra=abhimāna* という *psychic* な原理の源流が、*ahaṃ-kāra* (「わたくし」という発語) とともにはじまるコスモス創造へ、さらに Prajāpati の Vāc によるコスモス創造へと遡考されている。(III) では、*sat* というコスモス創造の第一原理から種々なる意味の *sattva* が派生することを解明し、そこから Sāṃkhya の *psychological* あるいは *ethical* な *sattva* が由来することが明らかにされている。*The large atman* の論文も、コスモス創造の最初の原理である *mahan atma* の意味を正確に定義した上で、そこから Sāṃkhya の *psychic* な *mahat=buddhi* が導出されている。van Buitenen 教授は、一つの論文を書かれる毎に、いよいよ明確に Veda の *cosmology* が *personal* な性格をもつこと、*cosmogony* が、全 *cosmos* 的な *individualization* あるいは *personification* の性格をもつことを明確にされていったようである。コスモス創造といっても、造物神の「わたくしは…しよう」「わたくしは…である」という *personal* な自己覚知からはじまり、造物神が *personal* に自己実現し自己達成していつて無数の個々の存在へと個別化してい

くことにほかならない。そのような造物神の personal な cosmogony が、個なる被造物の方から逆に辿られていくとき、yoga あるいは dhyāna の向上の道ともなるであろう。van Buitenen 教授は、Upaniṣad の根本真理である macrocosmos 即ち microcosmos という同一律は、より正確には、macranthropos 即ち micranthropos という同一律であることを論じておられる。わたくしには、いまだ理解の及ばないところが多いが、インド思想史の全体としての展開が、ここに明らかにされた「Veda の cosmology から古典哲学の psychology へ」という根本構造をもつことは、おそらく今後の研究の指針となるであろう。

とすると原始佛教思想史が、しばしば Buddhist psychology と誤解されるようなしかたで成立し展開したことも、このようなインド思想史の展開の根本構造と無関係でなかったはずである。佛教研究者が、Veda 祭儀文化までとは、いわずもがな、少なくとも Upaniṣad や Epic の哲学の研究を怠っていい理由はない、と考える。否むしろ、そのようなインド思想史の展開の根本構造を理解しないかぎり、佛教思想が、どのような思想の場から成立してきて、どのような思想的役割を果たしたか、も、解明されないであろう。これから佛教を研究しようとする若い人々が、佛教研究の内部に閉じこもらないで、ひろくインド思想史全体の運動の中で、佛教思想を理解するように努力していただきたい、と願わざるを得ない。そうしない限り、佛教思想そのものの理解も不徹底にとどまらざるを得ないし、インド思想史にとっても、一つのきわめて重要な構成要素となる佛教思想が、いつまでも埒外に放置されたままになるであろう。

シカゴ大学のインド学は、Department of Linguistics の South Asian Studies の分野と Department of Oriental Languages and Civilizations の Indic Studies の分野と Committee on South Asian Studies よって分掌されているが、ほとんど同じ教授陣が、それらの諸分野の指導にあたっている。上述した Bobrinskoy と van Buitenen の両教授が、所謂インド学——Veda からはじめて古典期に至るまでのインド文化史——の分野を担当しておられ

る。先に本誌に紹介された D. Pingree 氏は、Assistant Professor of the History of Science であり、Oriental Institute の Research Associate でもある。Department of History において “Origin of Islamic exact sciences” と “History of ancient astronomy” を講じておられる。その他、アメリカの大学の特色として——とくに1959年の the National Defence Act, Title VI によってそうなったのであるが——近代インドの言語・文学・歴史の研究がさかんである。E. C. Dimock (Associate Professor of Bengali Language and Literature), N. Zide (Assistant Professor of Hindi and Indian Linguistics), A. K. Ramanujan (Assistant Professor of Tamil) の諸教授及び多数の instructors が、近代インド研究の指導にあたっている。筆者は、この分野には、まったく無知であるが、これらの近代インド研究が、厳密な discipline にもとづく学問分野、また教育科目になるには、まだ時日を要するとの印象をうけた。

さてインド学の学的 discipline が、比較言語学、哲学、宗教学、考古学などの disciplines によって訓練された学者達によって次第に形成されてきたことは、いうまでもないが、いまやインド学が、一つの独立した discipline にもとづく学として確立されている現段階にあっても、インド学には無数の未解決の問題が残されているのであり、そもそも何が問題として残されているか、を知り、それらの問題を解決するために、他の disciplines の学問分野から新しい視野と新しい方法を導入することは、つねに必要なものであると考える。インド学や佛教学が気づかずにいるけれども、問題にしなくてはならない重要なテーマを、他の学問分野が開拓していること、あるいは他の discipline の学問分野がインド学や佛教学の問題解決に新しい視野と新しい方法を与えてくれるにちがいないこと——それが、シカゴ大学で学習し得た最も感謝すべきことの一つであった、と筆者は考えている。筆者は、比較言語学を比較言語学として学習する機会に恵まれなかったが、さしあたり関心を引いたのは、インド美術と Anthropology と History of Religions という三つの学問分野であった。そのうち、筆者が直接、授業に出席して学ぶことができたのは、Eliade と Kitagawa 両教授の教えられる History of Religions の

みであったが、それが、インド美術や Anthropology の両学問分野の重要性を気づかせるほど、スケールの大きいものであったのである。シカゴ大学の両学部そのものを紹介する準備は、まったくないが、History of Religions の学習を通して感得し得たことを、ごく簡単に報告してみたい。

いったい History of Religions は、いろいろな宗教の宗教者の存在理解——Eliade の言葉でいう archaic ontology——を究明するにあたって、美術及び建築の symbolism を読み解くという方法を用いる。とくに未開人や古代人のように文献をもたなかった、あるいは遺存しなかった文化の場合には、ほとんど美術及び建築だけからして、かれら宗教者達の存在理解を解明しなくてはならない。しかしそれだけにとどまらず、いかなる宗教であれ、宗教という形象を超えた絶対存在を信ずる信仰の存在理解の基本構造を解明するためには、美術及び建築が、きわめて有効な手がかりになる。たしかに、インド古代ヴェダ祭儀文化は、言葉の宗教であって、「神殿もなければ、神像もなかった」、したがって建築もなければ美術もなかったのであるが、アショカ王以後の佛教・ジャイナ教は、寺院建築及び美術とともに発達したのであり、つづいてヒンドウイズムは、寺院建築及び美術を中心とした宗教であった、といって過言でない。インド哲学や佛教哲学、とくに大乘佛教哲学を、寺院遺跡や美術遺物との関連において理解するには、まだまだ幾多の困難がのこされているようであるが、つぎのような書物は、インド哲学や佛教哲学を研究する者にとっても、必読の書ではなからうか。

A.K. Coomaraswami, "Elements of Buddhist iconography", 1935

B. Rowland, "The art and architecture of India", 1953

F.D.K. Bosch, "The golden germ", 1960

などなど。シカゴ大学の Department of Art には、かつて Ludwig Bachhofer がいたことがある。Early Indian sculpture, 2 vols. 1929 など、及びインドから中国へかけての建築・美術に関する多数の論文によって著名。現在は、P. Chandra (Associate Professor of Art) 教授が、インド美術を、H. A. Vanderstappen (Chairman of the Department of Art and Associate Professor of

Art) 教授が、中国及び日本の美術を担当しておられる。

Anthropology は、1800年代後半から1900年代前半にかけて多数の探検家達をもたらす未開民族に関する、あるいはアメリカ・インディアンに関する史料集や報告群を整理し集大成するところから学として形成されていったようである。History of Religions が、いかに多くの sources を Anthropology に負うか、は、

J. G. Frazer, "Golden Bough", 1890

E. B. Tylor, "Primitive culture", 1871

W. Schmidt, "Der Ursprung der Gottesidee", 1912-1955

などを想起するまでもない。インド学や佛教学を研究する者に対して Anthropology が与えてくれる視座の一つは、インド文化なり佛教文化なりを、言語・神話・宗教・芸術・政治・社会などの個々の学問分野へと分化してしまわないで、ある構造をもった全体として理解するアプローチであろう。シカゴ大学で1931年まで教えていた E. Sapir の論文集 "Culture, language and civilization" は、アメリカ・インディアン¹⁰の諸言語を、かれらの文化と関連させて研究したものとして著名である。1933年くらいから、シカゴ大学で教えた H. Hoijer も、Language in culture を編集している。インド文化や佛教文化のように長い歴史をもつ高度に発達した文化についても、個々の学問分野へ分化してしまわないで、ある一つの構造をもった全体として、どのような歴史的役割を果たしたかを理解することが必要である、おそらく Clark が試みようとしたように。近年の anthropology の新しい傾向は、従来、未開社会などの研究によって確立されてきた方法・原理などを、インドのようなある程度、高度の文化をもった社会へ適用することである。現在シカゴ大学の Paul Klapper Professor of Social Sciences である M. Singer には、"Shame and guilt, a psychoanalytic and a cultural study" (G. Piers), 1953, "Traditional India : Structure and change", 1959の著書がある。また Professor of Anthropology and Social Sciences である M. Marriott は、"Village India, studies in the little community", 1955を編集し、

ranking and community structure in five regions of India and Pakistan”, 1960を著作している。Associate Professor of History and Anthropology の B. S. Cohn も、インドに関心をもっているとのことである。Singer のはじめの著書を別にすれば、それらは、いずれも anthropology の discipline によって、複雑なインド社会を理解しようとしている。インドの古代・中世社会についても、佛教文化についても、新しい anthropological な研究が可能であるように思われる。

シカゴ大学の History of Religions あるいは Comparative religion の伝統は、アメリカの大学の中でも一、二を争うほど古い。初代のスタッフとして Buck とともに、Yale から招かれたのが、G. S. Goodspeed。当時、講座は、Comparative Religion and Ancient History と名づけられていた。かれには、“A History of the Babylonians and Assyrians”, 1902の著書がある。いま、この講座の歴史をあとづける余裕は、まったくないが、ここでどうしても言及しておきたいのは、1945年から1955年までシカゴ大学に、その人あり、と知られた Joachim Wach 教授とかれの後継者である Mircea Eliade 教授のことである。Wach は、E. Troeltch, Max Weber, R. Otto など、1900年代初頭に活躍した宗教に関心をもった社会学者、あるいは社会に関心をもった神学者、宗教学者の影響下に育った。他方で Husserl の現象学や Dilthey の解釈学といった歴史の中に生きる人間存在を哲学的に分析する discipline をも自家薬籠中のものとしていた。かれの宗教社会学が、歴史社会における個々の人間存在、あるいは個々の人間存在の構成する歴史社会を深く正確に分析していて、われわれの心を打つ所以である。かれの代表的著作としては、“Grundzüge einer Phenomenologie des Erlösungsgedankes” (かれの学位論文、後に “Der Erlösungsgedanke und seine Deutung”, 1922として出版)。

“Mahayana, besonders im Hinblick auf das Saddharmapūṇḍarika sūtra”, 1925

“Das Verstehen, Grundzüge einer Geschichte der hermeneutischen

Theorie im 19. Jahrhundert”, 3 Bände, 1926-1933

“Sociology of Religion”, 1944

“Types of Religious Experiences—Christian and Non-Christian”, 1951
などがあげられる。ここからも知られるように、かれの宗教社会学の眼は、アジア社会にまでも及んでいるが、しかしかれの宗教社会学の方法によって、われわれ自身が、より豊富な資料にもとづき、より進んだ研究の蓄積にもとづいて、インド・中央アジア・中国・日本などの宗教と社会の関係のありかたを研究することが必要であるであろう。Wach の高弟である J. M. Kitagawa 教授は、現在、シカゴ大学にあって、師の宗教社会学を、東洋とくに日本宗教の研究の方向へ発展させておられる。

Eliade 教授は、ルーマニアのブカレスト大学で哲学を専攻された。ヨーロッパ哲学全般、とくに実存哲学の深い造詣は、その頃、培われたものであるにちがいない。パリの L’Ecole des Hautes Études (Sorbonne) でも教えたことがあるが、現在はシカゴ大学の Sewell L. Avery Distinguished Service Professor of History of Religions である。今日、活躍する最も偉大な宗教学者の一人であると考えられている。教授は、カルカッタ大学の S. Dasgupta のもとでサンスクリットとインド哲学を専攻して博士学位を取得された。学位論文、“Yoga, Immortality and Freedom”, 1958 (“Le Yoga, Immortalité et Liberté”, 1954) は、インド哲学思想の実存的真実を、最も深く見究めたものだ、といってよい。多数の著書の中で、教授自身が、つねに学生達にエリアーデ宗教哲学のエッセンスとして推奨されるのは、つぎの書である。

“Cosmos and history, the myth of eternal return”, 1954 (原著は “Le mythe de l’éternel retour et répétition”, 1949)

“The sacred and profane”, 1959

“Patterns in comparative religion”, 1958 (原著は “Traité d’histoire des religions”, 1949)

である。これらの書物において、エリアーデ教授が、未開民族、古代文化などの宗教から豊富な実例を引用しつつ、また天・太陽・月・水・大地・植

物・女性などの symbolism の意味を解明しつつ、実証しようとしておられるのは、つぎのような三つの宗教哲学的真理である。

1) 聖なる存在は、いつ、どこにおいても the Center of the World という意味をもつ。

2) 聖なる行為は、「時のはじめ」 illo tempore における神々の原型的行為を re-actualize するという意味をもつ。

3) 聖なる存在の、聖なる行為によって創造され持続される聖なるコスモスは、Heaven と Earth と Underworld という構造をもち、これら三者が交通するところに種々なる symbolism の意味が具現する。インド文化や佛教文化において、寺院や佛塔や佛像が、the Center of the World という意味をもつことは、容易に理解されるであろう。またヴェーダ祭儀や佛教儀礼やヒンドウ儀礼における諸行為が、「時のはじめ」における神々のコスモス創造、あるいは仏陀の説法などの原型的行為を reactualize するという意味をもつことも、疑いない。インドや中国や日本において聖なるコスモスが、Heaven-Earth-Underworld の構造をもち、それが、さまざまな symbolism によって表現されていることも、周知のところである。エリアーデ教授の宗教哲学が、インド学や佛教学にとっても、きわめて深い示唆に富むことが記憶されなくてはならない。

筆者は、インド学は、インド学の、あるいは佛教学は、佛教学の、それぞれに固有の discipline によって教育され学習されなくてはならないことを十分に承知する者である。それらの disciplines が、それぞれ長い年月にわたるトレーニングとひたむきな専念によって習得されなくてはならないことも、わかっているつもりである。にもかかわらず、ここでインド美術や Anthropology や History of Religions を例に挙げて説明しようとしたように、他の学問分野の disciplines に関心をもって、それらから新しい問題を発見する視点や新しい問題解決のためのインスピレーションを学ぶことは、やはり必須ではあるまいか、と思う。わずかに一年の留学において筆者が、シカゴ大学において History of Religions から学び得たところを、敢えて論述して

みようとした所以である。

以上、ここに書き得たことよりも、はるかに多くの大切なことを筆者に学ばせてくれたシカゴ大学、そしてとくに J. A. B. van Buitenen と M. Eliade と J. M. Kitagawa の三教授に、心より感謝の誠を捧げたく思う。

後 書 き

わたくしは、いまを去ること三十数年前、1964年7月から1966年2月まで、大学院博士課程を終了したばかりの若い時期に、米国のシカゴ大学に一年間、つづいてウイスコンシン大学に八ヶ月間、留学する機会に恵まれた。よき師友に出会うことができ、ひたすら、純一に勉強し（後に若い学生諸君を励ますときに言ういいかたでは、日々二十四時間、勉強するつもりで勉強し）、しかし音楽会に出かけたり美術館や博物館に出かけたり、いろいろな専門のすぐれた日本人仲間達と夜を徹してだべったり、楽しむことは充分、楽しみもして、最も美しい青春の一頁を体験することができた。帰国後、ある学術雑誌の編集委員の先生から、シカゴ大学の「留学記」を書くように依頼されて、遅延に遅延を重ねながらも、ともかく書き上げたのであるが、その時、すでに遅し、その雑誌そのものが廃刊になって、結局、掲載されないままになってしまった。愛着がなかつたわけではないが、別に公刊する必要にせまられることもないままに、シカゴ大学のマークのあるノートにはさみ込んで忘れてしまっていた。このたび、研究室の書物をすべて、移動しなくてはならなくなって、箱詰めしている間に、ふとシカゴ大学時代のノートに目をとめ開いてみると、本稿が出てきた。昔の自分に出会ったようで、なつかしく、自分の原点を、もう一度確認したような思いにとらわれ、ワープロで打ち直して、有縁の方々に配布したりした。『仏教学セミナー』の編集委員の御一人が、それに目をとめて、親切にも「掲載なさってはどうか」と言ってお下さる。インド学も、佛教学も、この三十数年の間に、大きく進歩したのであるから、もとの原稿のまま、発表することには問題があるにはちがいないが、しかしインド学にしても、佛教学にしても、その間、専門化して個

別の研究テーマにおいては精緻な研究がなされてきたにもかかわらず、ここに書いたようなインド思想史の流れの中に佛教思想史を位置付けるという vision と梵蔵漢の佛教文献を文献学的に研究するという tool が相即しあう方向へ進展してきているようには思えない。むしろ、正反対に小さく専門化しつつある。わたくし自身が、三十数年来、インド思想史の中に佛教思想史を位置づけるように、そしてそのことによって佛教思想史そのものを確立するように努力してきたつもりであるのに、いまだに“Twelve Studies into the Origin of Buddhism”の project を完成させることができないのも、慙愧のきわみであり、教えを受けた先生方に対して申し訳ないかぎりであるが、しかし、いまでも、ここに書いたような佛教学の必然性と可能性は、かわっていないのではないかと、とも思う。その名も『仏教学セミナー』を称する本誌に三十数年ぶりに発表する機会に恵まれて、もし万一、これから仏教学を勉強しようとしておられる若い方々に読んでいただけて、さらに関心をもっていただけたら、それに過ぎる喜びはない。この仏教学の伝統ある大谷大学の若い学生諸君の中から、一人でも、二人でも、真の仏教学は、いかにあるべきか、を問い思惟する方が出てほしいと願いつつ、敢えて本誌編集委員の御好意に甘えさせていただく次第である。

最後に言及した三人のシカゴ大学の先生方は、この三十数年の間につぎつぎに鬼籍に入ってしまった。幽明、境を異にすることになってしまった。いまだに学恩に報ずるに、あまりにも乏しい研究成果しか挙げていないことを慙愧するとともに、遅れ馳せながら御冥福をお祈りさせていただく。三人の先生方のお仕事が、いま、あらためて読み直され、そこから新しい佛教学が生まれることを願ってやまない。